

現代アメリカの移民第 2 世代の同化をめぐる

—アレハンドロ・ポルテスらの「移民子弟の縦断的研究」(CILS) を中心に—

村井忠政 (名古屋市立大学名誉教授)

キーワード：現代アメリカ移民第 2 世代、分節化された同化、移民子弟の縦断的研究

20 世紀末から 21 世紀初頭のアメリカ合衆国に人種民族構成を大きく作り変えるような移民の大波が押し寄せている。これら現代の移民の多くはラテンアメリカ諸国とアジア諸国の出身者であり、そこにはかなりの数の高学歴の専門職従事者や起業家が含まれている。この 20 世紀末の移民が米国に定住し、その子どもたち（本報告ではこの現代アメリカの移民第 2 世代を「新第 2 世代 (the new second generation)」と呼ぶことにしたい）がアメリカ社会に適応し成人するにつれ、その同化をめぐる様々な問題が発生してきている。

かつて 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、東欧・南欧から大挙してアメリカに押し寄せた貧しい低学歴の移民の第 1 世代は、先住のアメリカ人の〈ネイティブズム〉と呼ばれる激しい移民排斥運動に遭いながらも、その子どもや孫の世代である第 2 世代と第 3 世代は、徐々にアメリカ社会に同化をとげることで主流の仲間入りしていった。一部の社会学者が主張しているように、かつての移民の子どもたちと同じく現代の移民の子どもたちもアメリカ社会に同化することで社会経済的階梯を順調に登って行き上昇同化 (upward assimilation) を遂げ、やがてはアメリカ社会主流 (American mainstream) の仲間入りをするのだろうか。それともいわゆる下降同化 (downward assimilation) のプロセスをたどり、「アンダークラス (underclass)」と呼ばれる都市の最貧困層に閉じ込められてしまうのであろうか。

現代アメリカ移民の「新第 2 世代」研究の第一人者であるポルテスとランボートは、1992 年と 1995 年—1996 年にかけて実施された共同研究プロジェクト「移民子弟の縦断的研究」(The Children of Immigrants Longitudinal Study=CILS) の分析結果を踏まえ、「新第 2 世代」の同化が決して直線的なプロセスではなく「分節化された同化 (segmented assimilation)」のプロセスをたどっていると主張する。今日の移民第 2 世代のグループの中には、スムーズに主流社会に入っていくことが予定されている者がいることもたしかであるが、それと同時に他方には、自分たちのエスニシティが力の源になっており、コミュニティのネットワークや資源を基盤にして社会的・経済的に這い上がっていくグループがいる。さらには、自らのエスニシティが選択の問題でもなければ、向上のための源でもなく、従属の印となっているようなグループも存在する。これらのグループの子どもたちは、アメリカのインナーシティに見られるような不平等と絶望の惨状を呈している多数の貧困

層の仲間入りをする危険にさらされている。今日の移民の第 2 世代たちのメンバーが、社会の底辺、すなわち新たな「レインボー・アンダークラス (rainbow underclass)」にいる人々の仲間入りをするかもしれないという見通しは、純然たる学術的な関心にとどまらない。というのも、もしそれが現実になれば、何百万人ものアメリカ人たちの人生を左右しかねないし、これらの貧困層が集住する都市やコミュニティの生活の質にも影響を及ぼしかねないからである。

このような理由から、ポルテスとランボートは、今日の移民を研究するにあたって「同化 (assimilation)」は依然として主要な社会学の分析概念ではあるが、今日の同化のプロセスはきわめて多くの予測不可能な偶然性や、あまりにも多くの変数によって影響を受けるため、伝統的な同化理論が説くように同化が一様かつ直線的な道をたどるということでははやできないと考える。かれらによれば、今日の移民第 2 世代は「分節化された同化 (segmented assimilation)」のプロセスをたどっていると定義することが正しい。この「分節化された同化」においては、移民グループによってその結果は異なるし、そこではアメリカの主流社会に急速に統合され受け入れられるという道は、可能な選択肢のひとつに過ぎない。

ポルテスらは、現代の移民第 2 世代の若者たちが首尾よくアメリカ社会に適応を遂げるためには、20 世紀初頭の若者たちとは比較にならないくらい、多くのチャンスと同時に大きな危険をもたらす多様な環境に立ち向かわなくてはならないと述べ、移民の子どもたちが教育面で目標を達成し上昇移動をとげるために克服しなければならない課題として 3 つの主要な問題を挙げている。その第 1 は依然としてなくならない人種差別の問題であり、第 2 は米国の労働市場の二極分化と格差の拡大という問題であり、第 3 には「アンダークラス」と呼ばれる都市 (インナーシティ) の最貧困層が固定されてしまっているという問題である。

本報告では、ポルテスらによる「新第 2 世代」の同化をめぐる実証的調査 (The Children of Immigrant Longitudinal Study) の分析結果を踏まえて、わが国の移民政策との関連で、その意義と理論的妥当性について検討する。

〈参考文献〉

Alejandro Portes and Rubén G. Rumbaut. 2001. *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*. University of California Press: Berkeley, Los Angeles, London.